

大学生の職業観形成における父親の影響

—愛知県内の大学3年生へのヒアリングと父親へのアンケート調査を通して—

矢島 修平・寺田 盛紀

1. 関連先行研究と本稿の課題

本稿は、人間関係論とくに親子関係論の視点から、大学生の職業観形成過程における両親、とくに父親の影響を明らかにしようとするものである。

まず、職業観の発達にキャリア(職業)モデルの存在が影響を与えることは、いくつかの研究から支持されている。すでにバンデューラ(A. Bandura) (1971)は、著書“Psychological modeling: conflicting theories”でキャリアモデルの重要性を主張している。わが国では田中・小川(1982)の調査が、職業的同一視というより古風な言い方で、それが若者の将来の職業適応に好ましい影響を与えることを示している。最近では、金井(2004)は高校生に行った調査において、キャリアモデルの有無がキャリア・パースペクティブや自己効力観、自己実現意欲、自立意識などで有意に働くことを解明している。さらに、松本(2005)は高校生に行った調査で、正のキャリアモデルの存在が職業意識の高さに、また負のモデルの存在が職業意識の低さに作用することを明らかにしている。

つぎに、本稿と同じく、キャリアモデルの中でも家庭、親に注目したものとして以下のような研究がある。ベネッセ総研(2001)の学習基本調査によると、親とよく話をしてる子は、なりたい職業を持っている割合が高く、学習に対する関心が高い。また、なりたい職業を持っている子は、学力が高いことを明らかにしている。本田・小松・田中・米村(2003)は、親との会話の多寡で、中学生の人生における価値観は変化すると述べている。小川、田中(1979、1980)は、親の職業が子どもの職業選択に及ぼす影響について、親の職業の継承性の観点から見た調査を、息子、娘の場合に分けて行っている。長男に対して高い継承期待があることが述べられている。さらに、両親から継承期待を担う子どもは、継承期待を担わない子どもに比べ、継承希望率が有意に高いこと、父親の職業の継承過程には、親の継承期待が媒介していることについて述べている。松本・川上(1974)は、中学生の希望職業とそれに影響力を持つ親の職業に対する態度との関連を分析した調査で、親の選職観と生徒の選職観の間に一致性を見出した。鹿

内(2005、2006)は、職業選択に対する親の影響を検討している。父親についても母親についても親を望ましいモデルとして認知している大学生は職業未決定状態が低い結果が得られたと言う。

そこで本稿では、親や家庭一般の影響や親の職業継承期待でなく、父親の役割に焦点化し、父親の職業意識や子ども・学生との関わりの中身が学生の職業意識にどう影響するのか、しないのか、またその様態について明らかにする。

2. 調査方法・内容

愛知県内の大学に所属する文系学部の3年生とその親に対して調査を行った。方法は、学生へのヒアリング(半構造化面接)、学生への質問紙調査、及びその親への質問紙調査である。調査対象人数は、学生20名とその親20名の計40名である。但し、1組だけ父親の都合により質問紙を母親が記入したため、分析からは除外した。そのため、分析対象は、学生20名とその親19名である。調査期間は、2008年9月から11月である。

就職活動を間近に控えた大学3年生は、職業に対して真剣に考え始める学年であることから、調査対象は大学3年生とした。また、文系学部は職業的な専門性がそれほど高くなく幅広い進路選択が可能であるため、職業的専門性の高い理系学部ではなく、文系学部の学生を対象とした。

1) 子に対するヒアリング調査の内容

まず、学生に対するヒアリング調査の内容項目を下記に示す。

親の職業についての印象、自分の希望職業などを詳しく聞くことによって、親からどのような影響を受けているかを明らかにしようとした。

- ① 家族構成：父母・兄弟だけでなく、祖父母・いとこ・おじ・おばなど同居している親族
- ② 自分の父親の職業の認知：父親の職業を知っているかどうか、また、知っている場合、業種・職種・勤

務時間・休暇など、できるだけ詳しく父親の職業について

- ③父親の職業に対するイメージ（肯定的・否定的という観点から）：父親の話・振る舞い、一般的イメージなど、父親の職業にどのようなイメージを持っているか、また、「いいイメージ」か「悪いイメージ」か
- ④家庭での仕事についての会話：父親が家で仕事の話をするかどうか、また、する場合にはそのタイミング、内容
- ⑤父親と同じ職業への希望：父親と同じ職業に就きたいかどうか、そう答えたときの理由・きっかけ
- ⑥現在の自分の希望職業とその理由：具体的な職業名だけでなく、条件や環境など
- ⑦親の自分の職業への期待：親が自分に期待している職業を知っているか、知っている場合にはそれがどのようなものか

2) 子に対する質問紙の内容

学生には、ヒアリング時に併せて質問紙にも回答してもらい、キャリアモデルと職業観について把握した。質問紙の内容は以下の通りである。

- ①自分が職業を選ぶ場合に、良い意味でモデルとなる人物がいるかどうか、選択肢の中から選んでももらった。選択肢は「父、母、兄・姉、祖父母、親戚（いとこ・おじ・おばなど）、学校の先生、友人、アルバイト先の先輩・上司、実習先でお世話になった人、歴史上の人物、有名人、その他、なし」であり、複数回答可とした。
- ②自分が職業を選ぶ場合に、このような人にはなりたくないという意味で「反面教師」的な人物がいるかどうか、選択肢の中から選んでももらった。選択肢は①と同じであり、複数回答可とした。
- ③自分が仕事を続けていく上で重要だと思うこと
学生に職業観を構成する個々の意識に関する20の項目（質問）を用意し、それぞれに「1. まったくそう思わない」、「2. あまりそう思わない」、「3. どちらとも言えない」、「4. そう思う」、「5. とてもそう思う」の5段階で回答してもらった。なお、質問項目は、寺田が2007年に名古屋大学で行ったアンケートを参考にし、現代の学生にはわかりにくいと思われる内容や、近年重要視されていると思われる項目などを一部改訂し作成した（「」は項目の略称）。
・「自分に与えられた使命を全うすること」—「使命感」
・「より多くの金銭を得ること」—「金銭」
・「よい労働条件を得ること」—「労働条件」

- ・「生きるための手段を得るためだけである」—「生計維持のみ」
- ・「自己のアイデンティティを確立すること」—「アイデンティティ」
- ・「社会の一員として義務を果たすこと」—「社会の一員」
- ・「自分の雇用を安定させること」—「雇用安定」
- ・「できるだけ高い地位に就くこと」—「地位」
- ・「人の命や安全を守ること」—「人の安全」
- ・「自分の夢を追求すること」—「夢追求」
- ・「独立して人に気兼ねなくやれること」—「独立」
- ・「仲間と楽しく働けること」—「仲間」
- ・「責任者として部下を率いること」—「責任者」
- ・「自分の専門知識や技術を活かせること」—「専門」
- ・「社会から評価されること」—「社会評価」
- ・「組織の一員として働くこと」—「組織」
- ・「職についても得られるものは何もない」—「無気力」
- ・「家族を養うこと」—「家族」
- ・「生活を充実させること」—「生活充実」
- ・「いつも何かにチャレンジすること」—「チャレンジ」

3) 父親に対する質問紙の内容

ヒアリングを行った者の父親にも質問紙で回答・記述してもらった。親が自分の職業についてどう感じているか、どのような職業観を持っているかを把握することにより、子の職業観との関係を明らかできると考えた。その内容は下記の通りである。

- ①年齢
- ②自分の職業について：自分の職業について、業種・職種など
- ③自分の職業のイメージ（肯定的・否定的という観点から）：肯定的な（満足できる）側面、否定的な（満足できない）側面から、自分の職業をどう捉えているかどうか
- ④家庭で自分の仕事の話をするか。また、子どもとどのような内容の話をするか。ヒアリングを行った子に対して、家庭で自分の仕事の話をするかどうか、また、その会話の内容
- ⑤子どもに自分と同じ職業に就いてほしいかどうか、また、その理由
- ⑥子どもにどのような職業についてほしいか。また、それを伝えているか。また、その職業を挙げた理由
- ⑦子どもが将来就きたい職業を知っているか。また、その職業について
- ⑧自分が仕事を続けていく上で重要だと思うこと

3. 調査結果とその分析

1) 回答結果

まず、子（学生）と親（父）の職業観の主な中身を紹介してみると、以下の点が指摘できる。

第1に、学生の仲間志向が非常に高く、「そう思う」が5人、「とてもそう思う」が14人であった。つぎに「無気力」志向が非常に低かった。「全くそう思わない」が15人に上った。また、「生活充実」が非常に多い。「そう思う」が7人、「とてもそう思う」が12人であった。

ついで、親の職業観についてみると、下記のような特徴を指摘できる。

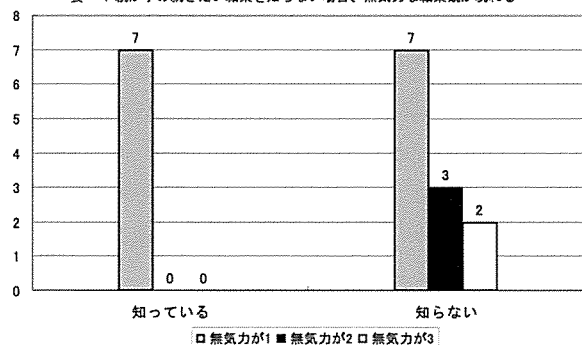
第1に、親の場合、「専門」志向が多く、「そう思う」が9人、「とてもそう思う」も4人いた。第2に、やはりと言うべきか、父親の「家族」志向が多い。「そう思う」がじつに10人、「とてもそう思う」が6人であった。第3に「生活充実」も非常に高い。「そう思う」が10人、「とてもそう思う」が5人であった。

2) 分析

次に、1つ1つの結果を学生や親の属性、職業観に関連する他の項目とクロスさせて分析してみた。その結果は、以下の通りである。

- ①まず、性別の視点から学生の職業観を見ると、「仲間」志向は女性の方が高い。女性の14人中12人が「とてもそう思う」であるのに対して、男性は6人中2人だけが「とてもそう思う」と回答している。
- ②さらに、「家族」志向は意外なことに男性の方がやや目立つ。女性の14人中7人が「そう思う」、4人が「どちらとも言えない」を選択しており、男性は6人中3人が「とてもそう思う」を選択している。
- ③所属大学別に学生の職業観の違いを見ると、特に大きな差異は見られなかった。
- ④他方、子どもが就きたいと思っている職業を知っている親は非常に少ない。その中でも、家で仕事の話をしていない親は、当然の子ども（学生）が就きたい職業も知らない。

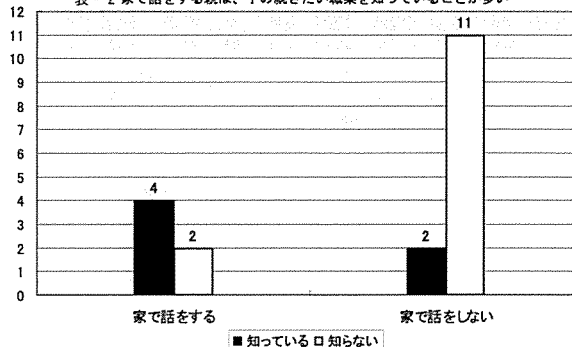
表-1 親が子の就きたい職業を知らない場合、無気力な職業観が現れる



- ⑤さらに、親が子どもの就きたい職業を知らない場合、子ども（学生）に無気力な職業観が現れる傾向がある。

親が子どもの就きたい職業を知っている場合は、学生は「職に就いても得られるものは何もない」という質問に対して全員が「まったくそう思わない」を選択している。親が知らない場合は12人中7人のみが「まったくそう思わない」のに対して、3人が「あまりそう思わない」、2人が「どちらとも言えない」を選択している。

表-2 家で話をする親は、子の就きたい職業を知っていることが多い



- ⑥父子間で職業観があまり一致していない親子は、家で仕事の話をしていないという家庭が多い。

職業観についての20の質問の内、一致している項目が10未満の親子は全て、親が「家で職業についての話をするか」という質問に対して「いいえ」と回答している。なお、①同じ数字を選択した場合、②親子で4と5を選択した場合、③親子で1と2を選択した場合を一致と見なした。

図-1 子の職業観

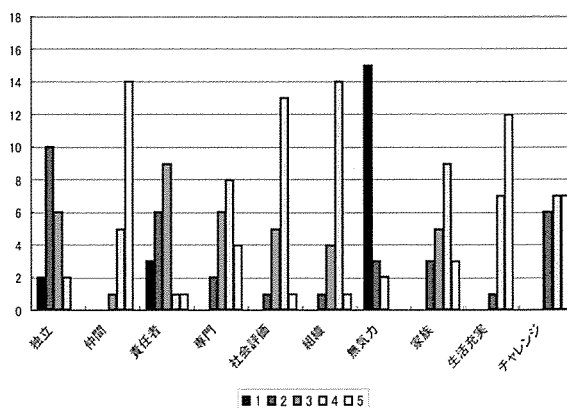
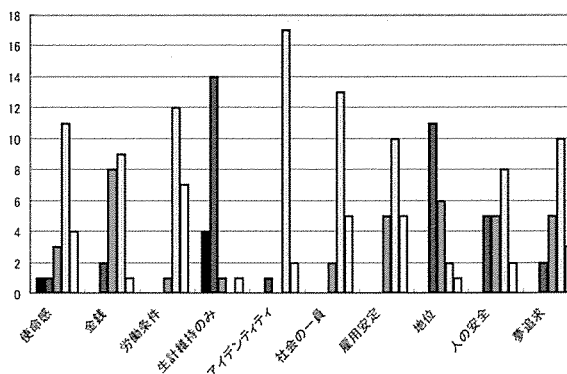
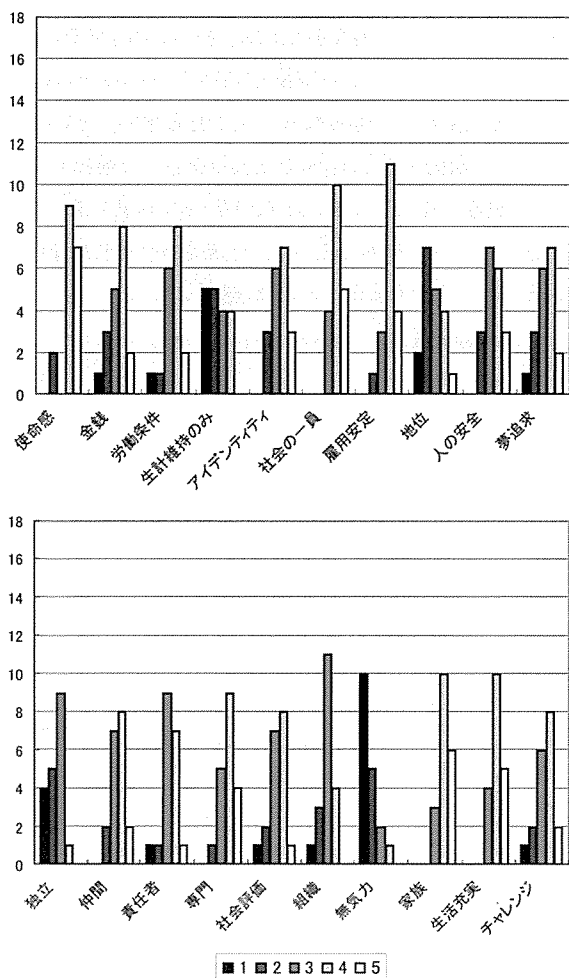


図-2 親の職業観



5. 考察

1) 学生と父親の職業観の傾向

本調査研究において、現代の学生とその親の職業観について若干の傾向を得ることができた。

まず、学生は、仕事に従事することに対して「仲間」や「生活充実」を大切にする傾向がある。他方、「無気力」が低く、それほど否定的な職業観を持っているわけでもないことがわかった。学生の職業観を性別に見た場合、女性の方が「仲間」を重視し、男性の方が「家族」を重視する傾向が見られた。

つぎに、今回対象となった親の職業観の傾向としては、「家族」、「生活充実」にあることも明らかになった。

2) 父親の期待

父親に対する調査で明らかになったのは、自分と同じ職業を期待する親は非常に少なく、本人の希望ややりがい、しかし、公務員などの安定した職業を期待する親が多いということであった。調査前の段階では、自分と同じ職業を子どもに期待をする父親が多いのではないかと予想していたが、まったく反対の結果になっ

た。父親が必ずしも現在の自分の職業に満足していないことによると推測される。

また、公務員などの安定した職業を期待する、という結果は、予測通りであった。

また、本調査では具体的な職業名に限定しなかったため、親が子どものやりがいや希望を重視する傾向も見出すことができた。自らの経験などを考慮して、子どもには少しでも楽しく、長く仕事をして欲しいという親の期待を見ることができた。

3) 親子のコミュニケーションと学生の職業観形成

本調査で明らかになったことは、子どもが就きたいと思っている職業を知っている親は非常に少ないということである。その中でも、当然のことながら家で自分の仕事の話をする親は、子どもの就きたい職業を知っていることが多い、また、親が子どもの就きたい職業を知っている場合、「無気力」な職業観が低く、積極的な職業観が形成されていることがわかった。さらに、親子間の職業観の一致度を見ると、不一致の親子は家で仕事の話をしていない場合が多いことも明らかになった。

これらの結果から、子どもが積極的な職業観を形成するためには、親子間の会話が重要であると言って差し支えない。

4) キャリアモデルとしての父親

最後にキャリアモデルという点で、プラスモデル、マイナスモデルの両面からみると、父親は比較的多くの場合、学生からプラスモデルとして挙げられている。父親の働く姿を見ていないのにも関わらず、なお父親を職業人のモデルとしてみているという結果は、興味深い。

また、父親の職業に対して悪いイメージを持っているにも関わらず、キャリアモデルとしては父親をプラスとして挙げている者もいた。これは、父親の職業は好ましくないが、職業人としての父親は見習うべきというように一種の「昇華」が生じているものと見られる。

まとめ

調査からは、父親の期待が先行研究で言われているほど大きな影響は及ぼしていないこと、しかし親子のコミュニケーションの多寡により職業観形成に影響が生じること、キャリアモデルとしての父親の存在は依然として大きいことが明らかになった。

本調査で、父親が子どもに及ぼす影響が非常に大き

いと予測していたが、当初の予測ほど大きな影響力は見いだすことができなかった。父親から影響を受けているという学生の自覚も小さく、やはり父親が働く姿を直接目にするできないことは大きな弊害であるかも知れない。

本論を通して、家庭内でのコミュニケーションの重要さとともに、家庭における職業観育成の重要性を確認できる。さらに言えば、現在のキャリア教育論や職業観形成論がともすると学校内の問題、インターンシップの問題としてのみ語られる傾向があるだけに、最も身近な職業人である父親の役割、あるいは家庭や社会全体の職業観形成作用も問題にされるべきであろう。

参考文献

- (1) A. バンデュラ著 原野広太郎・福島脩美編 (1975) 『モデリングの心理学—観察学習の理論と方法』、金子書房。
- (2) 田中宏二・小川一夫 (1982) 「教師職選択に及ぼす親の影響」日本教育心理学会『教育心理学研究』、第30号、No.3、pp.257-262。
- (3) 金井篤子 (2004) 「高校生の進路選択過程の心理学的メカニズム—自己決定経験とキャリア・モデルの役割」、寺田盛紀編 (2004) 『キャリア形成・就職のメカニズムの国際比較』、晃洋書房。
- (4) 松本浩司 (2008) 「高校生の職業観の構造と形成要因—職業モデルの関連を中心に」、日本キャリア教育学会『キャリア教育研究』、第26巻、2号、pp.57-67。
- (5) ベネッセ総研 (2001) 「第三回学習基本調査 分析レポート」
<http://www.crn.or.jp/LIBRARY/GAKUSHU/PDF/JOB.PDF>
- (6) 本田優子・小松綾子・田中美貴・米村健一 (2003) 「中学生とその親世代における人生に対する価値観と親子関係」、熊本大学『熊本大学教育学部紀要』、第52号、pp.63-74。
- (7) 内閣府政策統括官 (2001) 「第2回青少年の生活と意識に関する基本調査報告書」
<http://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/seikatu2/pdf/2-6-6.pdf>
<http://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/seikatu2/pdf/0-1.html>
- (8) 小川一夫・田中宏二 (1979) 「父親の職業が息子の職業選択に及ぼす影響に関する研究」、日本教育心理学会『教育心理学研究』、Vol.27、No.4、pp.45-54。
- (9) 小川一夫・田中宏二 (1980) 「親の職業が娘の職業選択に及ぼす影響に関する研究」日本教育心理学会『教育心理学研究』、Vol.28、No.4、pp.64-67。
- (10) 松本純平・川上善郎 (1974) 「職業的行動の発達の研究 (5)—希望職業に関与する親子関係因子—」『日本教育心理学会総会発表論文集』、No.16、pp.138-139。
- (11) 鹿内啓子 (2007) 「大学生の職業選択に対する職業意識と親の影響との関連性」、北星学園大学『北星学園大学文学部北星論集』、第44巻、第2号。